

花菖蒲は江戸時代の中頃より、各地に自生するノハナショウブの変わり咲きをもとに改良され発達してきた日本が世界に誇れる伝統園芸植物です。改良されてきた地域の名をとって、江戸系、伊勢系、肥後系というように分けられています。江戸系は主に花菖蒲園向き、肥後系や伊勢系は鉢植えの室内鑑賞向きに発達してきました。その他、山形県長井市に保存されている長井古種のような、江戸花菖蒲古花よりも更に古い時代の野生種に近い系統やアメリカなどで改良された外国系。またカキツバタやキショウブとの種間交配種を含め、現存する品種は2000品種以上に及んでいます。

花菖蒲の作り方

花菖蒲は日本で改良された園芸植物なので、日本の気候風土によくなじみ、栽培しやすい植物です。簡単に栽培法を紹介しますが、ポイントは、日当たりの良い所で育てること。水草と思わないこと。秋に十分肥料を与えること。株分けをかならず行うこと。の四つです。

植え場所

半日以上日の当たる、極端に乾燥しない場所に植え、土の表面の乾燥防止のため、敷きわらで株のまわりをおおいます。花菖蒲はカキツバタと異なり多湿を好まないの、年間を通して水はけ悪い場所に植えると、根腐れを起こしやすくなります。逆に、乾燥の激しい場所では草丈が伸びず、株も弱ります。

鉢植えでは、5～6号鉢で、赤玉土7、パーミキュライト3の混合土などに植えます。日当たりの良い場所に置き、1～2年ごとに必ず株分けして植え替えます。

水やり

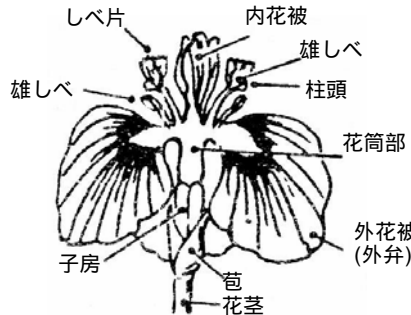
水草とよく間違われますが、花菖蒲は水草ではありません。花菖蒲園でも水をためるのは開花前から花が咲いている時期だけで、その後は水を落として畑作りします。一年中水をためると、根腐れしやすくなります。

庭植えでは、年間を通して、土の表面が極端に乾燥するときは水を与えます。鉢植えでは、水を張った浅い受け皿の中につけて底面から吸水させる「腰水管理」が楽ですが、あまり深いものは使わず、せいぜい1センチくらい水を溜める程度で十分です。時には受け皿の水が、乾いてなくなるくらいでいいのです。または、最初から少し大きめの鉢に植えるか、株が大きくなってきたら、一回り大きな鉢に鉢上げすれば、それほど水やりを心配する必要もありません。

肥料

根付いてから施すのがポイントで、元肥は禁物です。花後に株分けしたものは暑さが和らぐ秋口から中秋にかけて十分に施します。市販の化成肥料を置肥するなどして、株が充実するこの季節は肥料切れにならないよう注意します。分量は一般的な植物に与えるのとだいたい同じくらいに。

また、春の芽出しから開花までは、秋よりも少なめに施します。



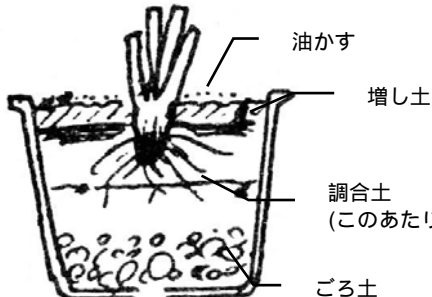
花の構造



プランタ栽培

新芽が出始めた頃鉢に表土を1センチ位入れ替えをする
油かす・固形肥料
葉の先がかれた時期葉の地ぎわで刈る

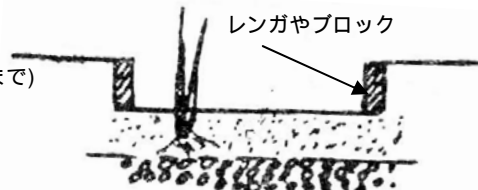
苗の葉は1/3くらい残して切る



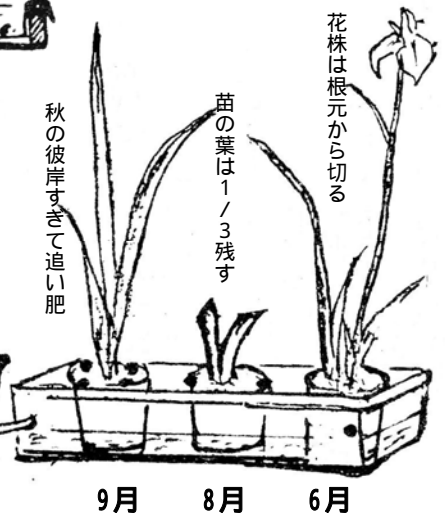
鉢栽培



畑栽培



ビニールプール栽培



秋の彼岸すぎて追い肥
苗の葉は1/3残す
花株は根元から切る

新谷花菖蒲園

〒795-0073

愛媛県大洲市新谷町甲5番地

管理者 八島信治良

TEL/FAX 0893-25-0800

E-mail: shop@niiyairis.net

当園のホームページ

<http://www.niiyairis.net>

新谷花菖蒲園の開花情報とお知らせは

当園のホームページをぜひご覧ください